

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

# 日本代表

## ～ 求められる日本の技術と経験 ～



### Profile

総合技術センター 国際グループ

**尾島 知** Satoshi Ojima

平成4年水資源開発公団（現水資源機構）入社。長良川河口堰、丹生ダム、徳山ダム、大山ダム、環境庁（現環境省）で、調査設計、環境保全、工事監理、地元調整、管理運用など幅広い業務を経験。世界水フォーラム事務局への出向を機に国際分野の業務に従事。国際協力機構（JICA）長期専門家としてメキシコ、インドネシアで水資源管理の指導などを実施。平成23年7月より現職。

水資源機構では、ダム・用水路などの建設・管理により長年培ってきた水資源開発と利用に関する技術と経験を活かし、総合技術センターが中心となり、国内外の他機関に対して機構の技術力を活用した技術支援を行っている。今回は、国際的な技術支援の分野で活躍する尾島さん取材した。



インドネシアのソロ川にて仕事の相棒と

### 公的機関だからこそその技術支援

「日本の技術や経験が、世界で、特にアジアで求められています。」と、丁寧で温かな印象の尾島さん。

「水資源機構は、アジア開発銀行、アジア開発銀行研究所等とともに、研修による意識の啓発や流域管理のための組織強化などの活動を通じて、アジア地域の水資源管理の改善に向けた支援をしています。」とニコニコ顔で話が続く。

「他にも、JICAを通じて水資源の開発や管理、防災、かんがいに関する専門家を世界各地へ派遣したり、海外からの研修生を受け入れたりしています。また、JICA等の国際協力機関からの調査等の業務受託も。」とのこと。——もう少し詳しく教えてもらえますか？

「アジア地域の多くは、雨期・乾期という自然環境の要素に加え、近年の急激な経済発展、平野部・都市部への人口集中・増加という社会的な環境の変化に伴い、洪水時の災害の規模が大きくなったり、水需要の増加に伴う水不足や水質汚染の問題が深刻になっています。これらは日本が戦後の経済発展プロセスにおいて直面してから長期的に取り組んできている問題と同じです。そのような課題を克服し経済発展につなげてきた経験や社会制度、技術力を持つ日本には、多くの国が視察に訪れます。」



機構のダムや用水路を視察に来られた方に対して、尾島さんは、『管理の大切さ』を伝えるよう心がけているという。

「『施設を造るのは使うため』であることを必ず伝えます。インフラ整備が課題となっている国々の方は施設整備がゴールと思ってしまいがちですが、社会が必要としているのは水問題の改善ですから、施設を正しく使うことが最も大切なのです。」他国へ行くと、日本の持つ知見や経験、技術などで役立つことがたくさんあると感じるという。

「このような技術支援は、多数かつ広域の関係者が存在する日本の主要水系において、施設の維持管理や、中立かつ公共的な立場から公平な水資源の配分を行ってきた水資源機構だからこそできることだと自負しています。」その思いが、尾島さんを国際業務へと導いている。



地下水の過剰利用により地盤沈下が進行し、満潮時には毎日冠水するインドネシア Semarang 市の工業地区

## 国内外の技術力の維持・向上



JICA プロジェクトで行った、地区住民も参加した水防訓練 (インドネシア)

「国際業務の活動は、国際貢献の意味だけでなく、日本の水管理でも参考にしています。例えば、平成 18 年にインドネシアで起きた大地震による用水路施設の被害状況は、日本国内の施設の耐震性を見直すきっかけになりました。」

さらに、機構の技術力の維持・向上にもつながるといいます。

「国際業務で得た水資源管理のリスク、不安定さの認識を国内業務に反映させていくことも、国際業務の役割のひとつです。」

機構では、定期的に関開く国際業務報告会等を通じて国際業務で得た情報などの共有を図り、水資源管理等に関する知見・能力向上や人材の育成を図っている。

## 日本代表としての責任感とプレッシャー

相手国の担当者もその国の水のプロフェッショナル。日本を代表するプロとして、相手の考えをよく知り、こちらの考えを伝え、信頼関係を構築することが大切だという。

「『日本代表』『水資源機構代表』として活躍するには、まだまだ知らないことが多すぎる、と正直感じています。私自身も日本や機構から学んでいる最中ですから。日本がこれまでに経験し、苦勞してきたことをしっかりと知り、機構の先輩方の時代からの経験と努力で築き上げてきた技術と、その裏側にある数々の苦勞を知り、自分自身が実務を重ねることで、『日本代表』として関係者に期待されるような国際業務が実現できるようになると思っています。」

水の問題は、日本だけでなく世界共通の問題である。

「なくてはならない水、その公共の福祉に関わる仕事ができることに幸せを感じています！」と笑顔を見せる。

「おかしなことかも知れませんが、国際業務を通して日本をますます好きになりました。」

日本の教育、考え方を再認識し、周りの人を敬い、平等を心がける日本人の美点を実感しているという。

「これからも、機会があれば海外に関わる仕事に携わっていきたいです。私たちの仕事への姿勢や携わった業務を通じて、他国の方がもっと日本や日本人を好きになってもらえたら嬉しいです。」

その日を目指し、今日も英語の資料に埋もれる尾島さんでした。



JICA 専門家としてメキシコに派遣された際には、「NHK のど自慢メキシコ大会」に出演し、審査員特別賞を受賞！坊主頭の同僚 3 人で『だんご 3 兄弟』を熱唱（熱演）し、メキシコに住む日本人の間で人気者になったとのこと。「人生の中でビジュアルで勝負したのは、その 1 回だけです」と素敵な笑顔でニコリ。（イラストは奥さん直筆）